



TITLE:

<學界展望>清初滿語文獻史料の現状

AUTHOR(S):

河内, 良弘

CITATION:

河内, 良弘. <學界展望>清初滿語文獻史料の現状. 東洋史研究 1989, 48(3): 550-565

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154292>

RIGHT:

學界展望

清初滿語文獻史料の現状

河内良弘

後金國成立以前の滿族（女眞族）自身の歴史記録は、彼等自身によつて記録されたものといへば、わずかの女眞文史料のほかにはなく、研究を進めるには明國や朝鮮の史料に頼るほかない。しかしスルハチが滿洲文字を制定して以後、滿族自身による記録が飛躍的に増え、情報量も急激に多くなつた。それらの滿文の記録は、滿族自身によつて書かれてゐるがために歴史・言語・文化研究のための第一等史料であるが、これらにもとづく研究は、これまでは日本・アメリカ・西ドイツ・ロシア等の諸國でむしろ盛んにおこなわれ、中國では稀にしかおこなわれなかつたことは奇異なことであつた。ところが近年、ことに文化大革命終息後、滿文檔案や少なからぬ數の滿文檔案の翻譯が公刊され、それらによる滿族・錫伯族の歴史・文化・言語等に關する中國人自身による研究にもわかに盛んになつた。

これまで存在は知られていながら見ることできなかつた滿文檔案、存在すら知られなかつた檔案、滿族の古老から採集した滿族の滿語による古い民話・傳説などが發掘され、原本、或はその翻譯、或はそれに基づく新しい研究成果が發表され、百花齊放とはこのよくなことを言うのかと思われる程の盛況を呈するまでになつた。新

しい知見は、歴史、言語、文學、民俗、藝術、民族理論等の各分野に及び、その研究成果の數と水準の高さに、われわれは壓倒されるばかりである。これらの新史料や新知見の理解なしに、今後清初史と滿族史の研究をすすめるのは不可能であらう。しかし個々の雜誌に發表された論文まで含めると、それらはかなりの數にのぼるので、ここでは一九八〇年代に新しく發表された滿文檔案およびその翻譯、滿洲語および錫伯族の語學書および辭書、滿族および錫伯族の歴史・文化・語學に關する論文・著作および雜誌、研究論文目錄などを紹介し、現時點での整理をしておきたい。清初漢文檔案および中文清初史研究論文は、重要ではあるがここでは割愛することとした。しかしこの原則にとられなかつた部分もある。個々の史料の中には、内容に立入つて紹介したものもあるが、紙數制限のために内容紹介を差控えたものもある。しかしその場合でも讀者の內容理解の爲の一助にと思つて、目次のみは記述することとした。

〔滿文史料〕

錫伯族遷徙考記 *sibe ukusai gurinene tebunubuh* *chiehun* (シボ族が移動し駐防した記録) 錫伯文・安俊、吳元豐、趙志強著。新疆人民出版社、一九八二年。目次一、序文三、本文一一一頁。本書については加藤直人氏がすでに『東洋學報』第六七卷第一・二號、二〇一—一三〇頁（一九八五年十二月）にくわしく紹介しているので、ここではこれに依據し簡略に述べておきたい。本書は中國第一歴史檔案館の吳元豐・趙志強兩氏が、まず同檔案館の新發見史料に依據して錫伯族の移動に關する數編の研究論文を中國語で發表され、次にその論文にもとづき錫伯文で錫伯族の讀者向けに

平易に書かれたのが本書である。冒頭の章は安俊氏の執筆に係る「シボ族の名の起源」で、その名の由来を鮮卑に求めている。次の章「シボ族の移駐」が前記兩氏の執筆によるもので、五つの節から成っている。いま便宜上五つの節に番號を附けると、第一節では、康熙三十一年四月、錫伯族がコルチンから清朝に進獻された後、滿洲上三旗に編入され、チチハル、ベドゥネ、ウラ等地に駐防させられた「第一次移駐」について述べてあり、第二節では康熙三十八年—四十年、ベドゥネの錫伯族は盛京へ、ウラの錫伯は北京へ、チチハルの錫伯はフフホトに移住させられた「第二次移駐」について、原因、經過など、詳細な分析が示されている。第三節では乾隆二十九年、錫伯族の一部が新疆の伊犁に移駐させられた「第三次移駐」について原因、沿途の經過が述べられている。第四節では嘉慶二十五年、雙城縣の開墾のため盛京・吉林兩省内の八旗滿洲、蒙古、漢軍の一部が移住させられた時期に、錫伯族も移住したとし、これを「第四次移駐」とし、前後の經過が述べてある。第五節では乾隆三十四年四月、盛京を出發した錫伯官兵が七月雲南に到着、翌三十五年撤兵し盛京に歸還するまでの経緯が解説してある。錫伯族が自身の歴史を淵源に遡って書いた體系的書物としては最初のもので、かような書籍が出版されるようになったのも、民族主義的意識の高揚の反映とみることが出来る。

錫伯族簡史 *sibe ukura i solokon suduri* (錫伯文) 安俊、吳元豐、趙志強著、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九八五年二月。本文五七〇頁、附表一 大清歷朝皇帝年表、二 伊犁將軍年表、三 伊犁錫伯領隊大臣年表、四 伊犁錫伯提督年表、五 伊犁錫伯苑副年表。本書については楠木賢道氏が『東洋學報』に書評を載せられ

る豫定なので、ここでは目次のみを紹介しておきたい。

第一章 序文

第二章 民族の源流と族名

第一節 錫伯族の名。第二節 錫伯族の源流。

第三章 コルチン・モンゴル所屬時代の錫伯族

第一節 九部が會盟しヌルハチと戦ったこと。第二節 錫伯を

コルチン・モンゴルの十旗に編入させたこと。

第四章 コルチン・モンゴルが錫伯らを清國に獻上し、清國政府

がニルに編成させたこと

第一節 吉林烏拉の錫伯が世管佐領を編成させられた事情およびその後の變化。第二節 齊齊哈爾、伯都訥、吉林烏拉等三所

に錫伯ニルを編成した發端と終り。

第五章 錫伯族の移動經過

第一節 盛京ならび到北京への移住。第二節 伊犁への移住。

第三節 黑龍江と吉林に後に移住したこと。

第六章 經濟生活

第一節 狩獵。第二節 牧畜業。第三節 農業。第四節 手工

業。第五節 商業。

第七章 錫伯族が祖國に果たした歴史的貢獻

第一節 祖國の邊境を保衛したこと。第二節 外國の侵略に反

抗し國家を保衛したこと。第三節 分裂を拒ぎ國家の統一を保

衛したこと。第四節 邊境を開拓し祖國を建設したこと。

第八章 教育と藝術

第一節 教育。第二節 言語文字の傳存と歴史。第三節 文學

と藝術(歌舞)。

第九章 錫伯族の風俗と宗教

第一節 道德を尙ぶ良い風習。第二節 宴會の禮儀。第三節 喪葬。第四節 錫伯族の節日。第五節 宗教と祭祀。第六節 服飾と飲食。

清代錫伯族檔案史料選編 (一) (二) (錫伯文)、中國第一歷史檔案館選編、新疆人民出版社、烏魯木齊、一九八七年三月。(一)五一—三頁、(二)四五—二頁。本書についても楠木賢道氏が詳しい書評を執筆される豫定なので、ここでは目次のみを紹介しておきたい。本書には全部で三八九件の檔案が収められており、各檔案の書出しに番號が附てある。左の紹介文中、括弧内に記したのがその番號である。

第一編 東北の錫伯族

第一章 コルチン蒙古等が上納する以前の錫伯族

第一節 九部の兵がヌルハチと戦ったこと並に降伏して貢物を齎したこと(一一六)。第二節 清國との交易(七一二)。第三節 屯田を耕種し車を出して公課を齎したこと(二三—二七)。第四節 雜事(二八—三三)。

第二章 黑龍江將軍管下の錫伯族

第一節 コルチン蒙古が錫伯族等を上納した事、並に清國人がニルに編成し安插した事(三四—四七)。第二節 驛丁の缺員に披甲人を選び、ニルを編成した(四八—五二)。第三節 官の補授革退と官兵の數(五三—六二)。第四節 軍器の授與と弓鐵工人の選出(六二—六九)。第五節 官兵と彼等の寡婦に俸祿錢糧を與えた事(七〇—七五)。第六節 屯田耕種と官糧の交付(七六—八四)。第七節 呼和浩特への移住の停止(八五—八九)。第八節 雜事(九〇—一〇八)。

第三章 盛京將軍管下の錫伯族

第一節 隊伍を分ち盛京に移住した事(一〇九—一二二)。第二節 沿途の逃亡者を嚴査拏捕した事(一二三—一二四)。第三節 人に與えた女子をしらべ部に送らせた事(一二五—一三八)。第四節 雲南出兵および盛京への歸還(一二三—一三八)。第五節 雜事(一三九—一四五)。

第二編 吉林將軍管下の錫伯族 (一四六—一五〇)

第一章 鑲紅旗蒙古第三甲喇、鑲黃旗蒙古固山、および甲喇に併合された錫伯族の名と數(一五一—一五二)

第二章 上驛院で公務をおこなった事(一五三—一六七)

第三編 新疆の錫伯族

第一章 錫伯族の伊犁遷徙

第一節 官兵を整理し發遣した事(一六八—一八一)。第二節 アンギ・ニルを編成し安插した事(一八二—一八九)。

第二章 錫伯部の任官と昇轉

第一節 領隊大臣の補授(一九〇—二〇四)。第二節 總管、苑副の補授(二〇五—二二二)。

以上第一冊

第三節 牛泉章京(佐領)、雲騎尉等の章京、驍騎校の補授(二二三—二六四)。

第三章 官員等の勸獎、參劾、考試、引見

第一節 賞賜、勸獎(二六五—二六七)。第二節 懲戒、參劾(二六八—二七二)。第三節 武官の考核(二七三—二七七)。第四節 總管等を京師に送り引見せしむること(二七八—二八

一)。

第四章 錫伯官兵に俸祿、錢糧(俸餉)と軍器を給した事

第一節 官兵に俸餉を與えたこと(二八二—二八七)。第二節 軍器を給し處理した事(二八八—二九一)。

第五章 駐防、哨探看守、邊境巡察の實施

第一節 タルバハダイの駐守(二九二—三〇二)。第二節 カシュガル城等の防守(三〇三—三二〇)。第三節 邊境巡察、哨探巡察(三二一—三三六)。第四節 哨探看守と捕賊(三三七—三三四)。

第六章 家畜の飼養と田地の耕種

第一節 繁殖牛の飼養(三三五—三四九)。第二節 繁殖馬の飼養(三五〇—三五五)。第三節 田地に力をつくして生活が向上した事(三五二—三六三)。

第七章 錫伯の未成年者を選び、ソロン部に遷徙させ甲冑を着させ職銜を與えたこと

第一節 錫伯部の未成年者を選びソロン部に遷徙させた事(三六四—三六五)。第二節 ソロン部に錫伯族の官員を任じた事(三六六—三七二)。

第八章 錫伯部の男子等を伊犁新滿洲營に移し、職銜を與えた事(三七二—三七七)

第九章 タルバハダイの新滿洲營の設立、および錫伯人等への職銜の授與(三七八—三八二)

第十章 雜事(三八二—三八九)

この書には清代の錫伯族の歴史の中、すでに知られている事柄に

以上第二冊

關する原史料が收められている外、今まで知られていなかった事實を記した史料も多く含まれている。史實の點ではより深く、時代的にもより長期にわたり、地理的にもより廣範な地域の史實を傳えるこの原史料集を基礎的文獻として得て、錫伯族史の研究は新たな段階に入ったものと言えよう。『錫伯族檔案史料』上下(中國第一歷史檔案館編、遼寧民族出版社、一九八九年七月)も近く出版されるのである。

滿族古神話(滿文)、愛新覺羅 烏拉熙春編著、內蒙古人民出版社、一九八七年四月。二六頁。本書には次の九編の滿族古神話が收録されている。(一)三仙女 (二)滿洲の起源 (三)老罕王 (四)伊徹滿洲的傳説 (五)齊齊哈爾建城的傳説 (六)薩滿與喇嘛鬪法 (七)女丹薩滿 (八)尼山薩滿 (九)打仗的故事。本書の前言によれば著者は一九八五年、黑龍江省において滿洲語の調査に従事したが、その際『滿洲の起源』『尼山薩滿』を除く數篇の神話故事を富裕縣友誼鄉三家子屯で收集した。その中の大部分は當時すでに八十歳近く、且重い病を負った計春生老人が、滿語を以て講述したものであるという。各篇の構成は、偶數頁に滿洲文字で原文が十三行立で記されており、次の奇數頁に横書きに對譯が施されている。對譯は每語三段立で、上段には滿語のローマ字轉寫、中段には國際音標文字による轉寫、下段には漢譯が記され、各篇のおわりに注釋と譯文が記されている。ただし『滿洲の起源』『尼山薩滿』には國際音標文字の注音はない。本書の特色はまず滿語の黑龍江方言を話す計春生老人の語音を音標文字に寫し、それに標準滿語を配し、對譯を施した點にある。従つて本書は滿語の中級テキストであると同時に富裕縣地方の方言を研究する上でも、また滿族の神話と故事の研究の上でも貴重な史

料を提供するものである。

『滿文史料翻譯』

清初内國史院滿文檔案譯編（上、天聰朝、崇德朝）。中國第一歴史檔案館、光明日報出版社、一九八六年五月序。本文五二八頁。本書は中國第一歴史檔案館所蔵の「清入關前内國史院滿文檔案」の中から選譯し、年月順に配列し編輯したものである。譯者は中國第一歴史檔案館滿文部の關孝廉、趙志強、郭美蘭氏。この「滿文檔案」の原本は四十七冊が現存する。その内譯は天聰朝のもの十八冊、崇德朝二十九冊であるが、この中、天聰元年から五年に到る檔案、および崇德元年檔案は「滿文老檔」と重複するので譯出されず、天聰七年から九年に到るものと、崇德二年から八年に到るまでの二十五冊、一、九八五件、四十餘萬字が譯出され、本書『清初内國史院滿文檔案譯編』に收録されている。

内國史院の前身は文館といい、天聰三年（一六二九）四月、盛京に設立された。文館は天聰十年三月、内國史院、内祕書院、内弘文院の内三院に改められた。内國史院の職掌は汗の起居詔令の記注、御製文字の收蔵、汗の用兵行政事宜の史書への編纂、祭天祝文等の撰擬、歷代祖宗實錄の纂修、などであつて、現存の『清入關前内國史院滿文檔案』は、内國史院が國史を纂修し輯録する時に使用した檔案材料である。この檔案は、『大清太宗文皇帝實錄』の纂修の時に用いられたが、記事の中には文言に塗抹、削除、改寫、増添された箇所も多い。本書ではその改寫、削除の部分も原文のまま翻譯し、當時の歴史的事實の復元につとめてある。本書は崇德元年十二月の記事で終る『滿文老檔』の後繼史料として重要な意義をもつと

共に、清初の政治、經濟、外交、軍事、文化、官制、風俗等の面において貴重な基本史料を提供するものである。

滿文國史檔選譯『歷史檔案』一九八二・四、一五—二四頁。中國第一歴史檔案館 關孝廉、郭美蘭 選譯。本書は天聰七年および八年の滿文國史檔からの選譯で、天聰七年十一月二十五日から八年十二月二十八日に到るまで、三十件の滿文檔案の翻譯が採録されている。ここに收録された文獻はいずれも前掲の『清初内國史院滿文檔案譯編 上』に採録されており、譯文もほぼ似ているが、異なった部分もある。たとえば『選譯』天聰八年十一月初十日の「分定各部游牧地界」では「與兩黃旗下多諾楚虎爾、達賴」の後に十七行の文章がつづくが、『滿文檔案譯編』では、この部分は「原檔殘缺」となっている。また『選譯』天聰八年十一月二十三日、「宣諭狩獵紀律」では「繩約鞍轡、勿得相竊。……」となっているが、『滿文檔案譯編』では「……」の部分が「是夜駐蹕養息牧」となっている、というようにに兩者には差異が認められるので、史料として採用する時は慎重に取扱う必要がある。

崇德三年滿文檔案譯編（中文）季永海、劉景憲 譯編、遼瀋書社、一九八八年十月。前言、季永海、本文二八四頁。本書は中國第一歴史檔案館所蔵の崇德三年滿文檔案の譯注であつて、原本の「三年檔」は一箇月一冊、全十二冊より成る。季永海氏の前言によれば、『三年檔』と『清實錄』と比較すると、記事の内容から三種に分類できるものである。一は内容が完全に同じ部分で數の上では多くはない。二は内容が同じであっても『清實錄』の記事が『三年檔』ほどには詳細でない部分、或は加工改寫した部分。三は『清實錄』に記載されていない記事を保存している部分である。内容からみると

『三年檔』は『清實錄』の同三年の記録の五分の三を占めるが、これは『清實錄』の底本というのではなく、『清實錄』を編纂する際に参照し、その中のいくらかの資料を採用したものである。いずれにせよわが國に將來され、或は翻譯された『滿文老檔』『舊滿洲檔』は、どれも崇徳元年十二月で終っている。本書はその後の缺を補うもので、太宗時代の政治、外交、軍事、經濟および言語學の上で、極めて珍貴な資料を提供する文獻である。

さきに述べた『清初内國史院滿文檔案譯編』にも、「崇徳三年滿文檔案」は含まれている。同じ原文から譯出された譯文であるが、兩者には差違が認められる。もとより兩譯文に意味上の決定的相違というものは認められないが、『崇徳三年滿文檔案譯編』の方が、やや丁寧に譯出されているようである。

三姓副都統衙門滿文檔案譯編 遼寧省檔案館、遼寧社會科學院歷史研究所、瀋陽故宮博物館 譯編。遼瀋書社、瀋陽、一九八四年十二月。譯編説明三頁。目次二六頁。本文四六二頁。遼寧省檔案館關克笑、沈微、遼寧社會科學院歷史研究所關嘉錄、瀋陽故宮博物館王佩環 選譯。本書は遼寧省檔案館所藏の『三姓副都統衙門檔』の滿文檔案中から選び出した檔案を翻譯編輯したものである。乾隆八年八月二十三日から光緒三十二年十二月初八日に到るまでの檔案一七八件が收録されている。三姓城は清代東北邊境の重鎮で、康熙五十三年にはじめて協領衙門が設けられ、雍正十年に副都統衙門と改められ、光緒末年に及んだ。同衙門の主要職掌は黑龍江中下流域から庫頁島（樺太）およびウスリー江流域と、同地方に居住する赫哲費雅喀人と庫頁費雅喀人等を管轄することであった。貢貂賞烏林制度は清朝政府が三姓地區の赫哲費雅喀や庫頁費雅喀に對しておこなつ

た重要制度の一であって、本書においても主に貢貂賞烏林を中心として文獻が選擇されている。檔案は、一、關領和頒賞烏林。二、收納和解送貢貂。三、供應貢貂人口糧等。四、處理違禁情事及恤賞罹難官兵。五、官府和私人貿易貂皮。六、霍集璠娶妻及薩爾罕錐病故。七、處理赫哲、庫頁費雅喀人之間的殺人案件。八、徵調赫哲人戍守、巡查、「劍匪」并領給餉銀、子藥等。九、沙俄的入侵和清朝的對策。十、換取鄂倫春、赫哲人之野牲、の十項に分類されている。この地域の赫哲費雅喀、庫頁費雅喀の生活、風俗、文化、清朝の對應、歷史等を知るための第一級史料である。

盛京刑部原檔 清太宗崇徳三年至崇徳四年、中國人民大學清史研究所、中國第一歷史檔案館 譯。群衆出版社 北京、一九八五年三月。中國人民大學清史研究所 郭成康、劉景憲 譯注。中國第一歷史檔案館滿文部 屈六生 審校。中國第一歷史檔案館所藏の『盛京原檔』には、清入關前の吏、戶、禮、兵、刑等五部が保存した滿文檔案、およびその他の雜檔二三一件が含まれている。大部分は新滿文（有圈點滿文）で墨書してあるが、老滿文（無圈點滿文）で書寫された部分もある。その中、第一六〇號から二三一號までが刑部檔案ですべて七十二件。これらは清太宗崇徳三年（一六三八）正月から翌年十二月に至る二年間に刑部が審理した四三四條の案件であつて、このたび全部譯出され『盛京刑部原檔』として出版された。これまで『滿文老檔』『舊滿洲檔』が譯出あるいは出版され、清初史研究に貢獻するところ多大であつたが、これらの書の記事は周知の如く太宗崇徳元年十二月で終っている。

清朝入關前の天聰五年（一六三二）、刑部が設立されると、民事の微細な案件はおおむねニル・エジュンが審結に當つたが、やや大

きな案件は一律に刑部に送って審理した。その外、兵部、戸部、禮部、理藩院等の部院も刑部と關係のあるいくつかの案件を承審した。『盛京刑部原檔』は崇德三年以後の刑部の記録であつて、しかもこれまで纂改潤飾を経ず、素朴な本來の面影を残した、滿族社會と清入關前史の研究の爲の第一等史料である。本書を讀むには、孟昭信『盛京刑部原檔』與清入關前史研究』『史學集刊』一九八九・三、(吉林大學)を参照するとよい。

清雍正朝 鑲紅旗檔 劉厚生譯 薛虹、栗振復 校。東北師範大學出版社、長春、一九八五年四月。一二七頁、人名漢譯表一八頁。

本書は東洋文庫清代史研究室 神田信夫、松村潤、岡田英弘、細谷良夫 譯編『鑲紅旗檔——雍正朝——』(昭和四十七)の中國語譯である。これは東洋文庫所藏の北京の鑲紅旗滿洲都統衙門の檔案の翻譯であつて、檔案の件数は雍正元年から民國十四年まで二百年間、二千件以上にのぼる。この檔案は、清代史研究室の人々により整理翻譯され、その中の雍正朝の分、五十四件が東洋文庫から出版された。八旗制度や雍正年間の旗人の社會生活を知る上で重要な史料である。東北師範大學から出されたのはその翻譯で、日本版にある滿文ローマ字轉寫の部分は省かれ、卷末に「人名漢譯表」が附録としてつけられている。

滿文土爾扈特檔案譯編 中國社會科學院民族研究所民族史研究室、中國第一歷史檔案館滿文部 譯編。民族出版社、北京、一九八八年二月。本書はすでに漢譯してあつた滿文土爾扈特文書四〇九件と七〇件の月摺檔中から、一四五件の檔案を選び出し、時の順序により配列して編輯した史料集であつて、乾隆三十六年三月二十二日の「諭定邊左副將軍車布登札布等對土爾扈特來歸之處置」に始まり、

乾隆四十年閏十月二十四日の「伊犁將軍伊勒圖奏撤回各游牧地關照大臣等事宜摺」に到る文書から成つてゐる。檔案の多くは土爾扈特蒙古が清國に歸屬する前後の頃のものに集中しているが、その内容は本書の前言によれば大要つぎの六つに概括されている。

一、清國政府が土爾扈特蒙古の東歸の消息を知つた後に引き起こされた懷疑と、清國政府が土爾扈特蒙古に對して收撫政策を實施することを確定するに到るまでの過程。

二、土爾扈特蒙古が伊犁河流域に歸るまでの現場記述と東歸の人数、戸數の實地調査。

三、土爾扈特蒙古の部衆への賑濟と、土爾扈特首領への封賞についての詳細な情況。

四、渥巴錫、策伯克多爾濟、舍楞らの承德への入謁、および東歸鬭争を指導した主要首領の回國後の政治的生涯。

五、土爾扈特蒙古部衆の游牧地の分割と變遷、および乾隆三十九年、渥巴錫が頒布した部落管理法規。

六、土爾扈特蒙古の歴史と王公世系等の記述。

トルグット族は、明代にはイルティシュ川上流にいたが、ジュンガル部と争い、一六三〇年ロシア領に逃げ、ヴォルガ川に游牧していた。しかし清朝が伊犁を平定すると(乾隆二十三年)、渥巴錫(ウバシ)に率いられ、乾隆三十五年に出發し、伊犁に着いた。本檔案譯編は彼等の伊犁到着後の事情に光明をあてたもので、これによってこれまで未知の事實で、あらたに發掘された部分もまた多い。

錫伯族簡史(中文) 錫伯族簡史編寫組、民族出版社、北京、一九八六年六月。(國家民族問題五種叢書之一、中國少數民族簡史叢書)、一四四頁。本書は先に記した滿文の書と同書名であるが、

一方が他方の翻譯ではない。前者を読む時の参考になるので、目次のみを記す。

第一章 概論。第二章 族名與族源。第三章 清代的錫伯族。第四章 民主革命時期的錫伯族。第五章 錫伯族的社會組織和經濟生活。第六章 錫伯族的文化。第七章 生活習俗。第八章 宗教信仰與道德風尚。附錄 大事記

次の書籍も中文で書かれているが、錫伯族の歴史・文化の研究のための基本的文獻である。『錫伯族文學歷史論文集』（新疆維吾爾自治區社會科學院民族研究所民族史研究室、一九八一年十二月）。次の書も中文で書かれた書であるが、錫伯文『錫伯族簡史』を読むための参考になるので、書名と目次のみを記しておきたい。

錫伯族史論考 遼寧省民族研究所編、遼寧民族出版社、瀋陽、一九八六年八月、二六二頁。

錫伯族屬淺析

錫伯族源考略

錫伯族源新考

英雄民族的搖籃——從嘎仙洞北魏石刻祝文看錫伯族之源流

錫伯族早期社會組織及其經濟生活

遼代錫伯族先民研究管見

錫伯族由科爾沁蒙古旗編入滿洲八旗始末

錫伯族的遷徙

太平寺始末

瀋陽太平寺及錫伯碑文雜議

漫話錫伯家廟

錫伯家廟碑文考
錫伯寺廟拾零

新疆地區的錫伯族簡況

黑龍江省雙城縣的錫伯族

撫順錫伯族社會歷史調查述略

錫伯族的婚禮

整理錫伯族「譜書」瑣談

〔辭書〕

錫伯語辭典 佟王泉、賀靈、吳文齡、穆克登布、卜爾塔里 整理。新疆人民出版社、一九八七年十月、本文二二〇頁、索引四一六頁、錫伯文書名は *Site Manju gisun i buleku bithe*。目次一頁。索引は次の六項目から成っている。(一)滿洲語十二字頭表の順序による語頭語索引、一一八頁。(二)總綱、滿洲語十二字頭表の順序による總合語彙索引、九一—一八八頁。(三)總綱にない語彙の索引、一八九—二〇一頁。(四)部類内容の目次、二〇二—二四頁。(五)部類内容、二五一—四〇三頁。(六)部類目次、四〇四—四一六頁。以下改頁されて本文が一頁から一三三〇頁までつづく。

最近錫伯語の書籍が數多く出版されて、未知であった錫伯族の世界に踏みこむことができるようになったのは幸いであるが、現代錫伯語の適當な辭書がないのには當惑させられる。たとえば現代錫伯語で *tachiyar* は宗教、*tachun huwasabun* は教育であるが、『滿和辭典』にそのような譯は載せられていない。*necin* は『滿和』では平坦、和平の意しか記されないが、現代錫伯語では侵略の意である。かように現代錫伯語辭典はなくてはならぬ書であるが、本書は

趙志強・吳元豐

佟清福・文明

涂長勝

安俊

吳扎拉・克堯

玉麟

韓啓昆

蕭夫

徐恆晉・馬協弟

吳扎拉・克堯・曹熙

米文平

蕭夫

吳扎拉・克堯

吳元豐・趙志強

吳作新

關方

鐵玉欽

趙志強・吳元豐

名は『錫伯語詞典』であっても、實は『御製清文鑑』の本文とその索引である。本格的な『現代錫伯語辭典』が出版されるまで、不便と失望落膽はつづくであらう。

簡明滿漢辭典 劉厚生、關克笑、沈微、牛建強 編著。河南大學出版社、一九八八年三月。序文 王鍾翰。本文四二七頁。附表一 滿語拼音字母表、二 滿語音節字母表、三 新老滿文字母對照表、四 滿語詞類總表、五 人稱代詞表、六 滿語格助詞表、七 動詞的「時」表、八 動詞的「態」表、九 動詞的「式」表、十 數詞表、十一 度量衡單位表、十二 千支表、十三 二十四節氣表、十四 滿文篆字名稱表、十五 滿語附加成份使用說明總表、十六 清代皇帝世系表。本書は科學的方法を用いて編纂された中國最初の『滿漢辭書』である。語彙はアルファベット順に配列されている。各語彙は滿洲文字で見出し語が示され、ローマ字轉寫および譯語が示される。語彙は大變豊富で、特に檔案や奏摺を讀むのに有益である。たとえば *šū be wesilulere dula* 崇文門や文津閣、文華殿等は『滿和辭典』になく本書に採録されており、その他 *se asihan hūsun etuhun* 年富力強、*se arhun* 年貌、*ambarame sindambi* 大選、*aŋaha tušan* 職掌などは本書に載つて『滿和辭典』になく語である。ただし *bardangi* 大言をはくこと、*waliyame fai-yame gamanbi* 不問に付する、*keijine bi* 澤山にある、などの語は『滿和辭典』にあつても本書にはないから、本書だけですべて用が足りるというわけにはいかないが、使い勝手もよく、檔案に頻出する重要語彙の多くが採録されているから、本書は滿文官文書の讀解に必須の工具書と言えるであらう。附録の十六項の表も大變有益である。

滿洲語文語辭典 福田昆之編、F・L・L發行、横濱、一九八七年十月、序文三頁、「動詞ゼロ語尾形のはたらき」二頁、本文三一九三頁。この辭典は滿洲語語彙を口語譯した辭典で、譯語と用例の豊富なことが特徴的である。本辭典の編纂は編者が昭和五十二年に『擇繙聊齋志異』の譯注をはじめた時に開始された。そして『滿文金瓶梅』『合璧西廂記』『滿洲實錄』『滿文老檔・太祖紀』『滿文老檔・太宗紀』等から適切な用例を豊富に引用し、譯語を附し、アミオ『滿佛辭典』、ザハロフ『滿露大辭典』、ハウアー『滿獨辭典』、羽田亨『滿和辭典』などの辭書からも語彙を採集し、編者自身がタイプライターでタイプして成った苦心の勞作である。語彙にはすべて品詞が示されており、用例には出典が記されていることも、これまでの辭書にない秀れた點である。bade には(の)の意があるのに『滿和辭典』には示されていないかつし、jakade には(のそばに)の意があるのに『滿和辭典』にはなかった。これらはほんの二例であるが、基本的語彙の譯語で改良されたものがすくなくない。ただ滿文檔案の讀解のさいには、やや不便な點がなくもない。たとえば *aŋaha tušan* 責任、*aliha amban* 尙書、*baicame tuwara hafaŋ* 監察御史などの語がなく、*jurgan* の語はあるけれども、部院、衙門の譯語が見當らないというように、官衙の文書を讀むさいには、この一冊では充分とは言えない部分もある。しかし同じ官衙の用語でも *beve madagan* 元利合計、*wenšu* 文書などは記されており、用例の豊富なこと、適切な現代語譯が施されていること、用例に出典が示されていることなどで、日本人に使い易く、且これまでの世界の滿語辭典の水準を抜いた秀れた辭典と言えよう。

舊清語辭典(滿文) 新疆維吾爾自治區古籍整理辦公室整理。新

疆人民出版社。一九八七年十二月。序文、一二頁。滿語アルファベットによる語彙索引、九一頁。本文、五二二頁。滿文書名は *Yan-giyen kooli ci tuki-yeme tucibuhe fe manju gisun i bihe*、「舊清語」とは「實録内擇出舊清語」の通稱であって、實名は前記の滿文書名である。

この辭典の出版される十八年前、『舊清語』の解説と全譯と語彙索引、および漢文實録との對比とが日本人によって出版された。

今西春秋「舊清語譯解」「東方學紀要」三、天理大學おやさと研究所、一九六九年、がそれである。これによれば『舊清語』は乾隆年間に改修された太祖・太宗・世祖三代の實録の中から、滿洲古語すなわち舊清語を抽出し、これを新しい滿洲語で解釋したものである。この本には全部で十四卷十四冊四百丁餘の完全本と、最後の十三、十四卷を缺いて十二卷しかない不完全本とがある。京都大學文學部史學觀覽室東洋史 B1c8 に『滿文舊清語』の見出しで保存されているものは前者、十四卷の完全本であり、東洋文庫收藏本は第一卷より第十二卷までの不完全本である。また天理圖書館には北京故宮の所藏の『舊清語』の青寫眞本が第一卷より第五卷、および第九卷の全六卷六冊が保存されている。右の諸本はどれも各頁六行。見出語は太字、譯語は改行のうえ細字で記されている。

本書の中、第一卷と第二卷とは太祖實録から抽出されたもので總語彙數は一七一。第三卷から第八卷までは太宗實録からのもので總語彙數は三四五。第九・十卷は世祖實録からのもので一二三語。第十一・十二卷は上項に洩れた語句を拾いあげて收録したものであるが、太祖・太宗實録からだけで世祖實録からのものはない。第十三卷は滿文老檔太祖紀からのもので五二語。第十四卷は滿文老檔太祖

紀および太宗紀からで三七語。『舊清語』は以上八〇七語句を實録の年月順に記載したものである。以上の舊清語を時代別に整理すると、太祖時代二五九語、太宗時代四一六語、世祖時代一二〇餘語となる。舊滿語と新滿語とが何時交代したものか確たる劃期はないが、入關後、おびただしい漢文化に觸れた順治年間が始まり、康熙年間に入つて交代は急速に進み、乾隆年間には舊清語の意味すら分らなくなり、かような『舊清語』の語彙辭典の必要が生じたのであろう。

本書、新疆人民出版社の『舊清語辭典』は、各頁九行。見出語は太字。譯語はおおむね改行せず、見出語につづけて記してある。これは日本傳存のどの本とも異なる。中國に傳存した刊本を鉛印したものか、或は或る種の刊本に依據して編輯したものであるらしい。卷ごとに卷數が記されており、最後は *karu bihei gisun ambula buyarahabi* で終っているから、本書は所謂十四卷の完全本であり、滿洲語のアルファベット順序による語彙索引が附いているので便利である。本書は滿文實録の記述の中で正確な意味の掴み難かった語彙に解釋を施したものであるから、本書の各語彙が實録のどの部分に記されているのか、漢文實録の箇所と對比して示して欲しかった。今西氏の譯解にはそれが示されているのである。本書は稀觀書で、出版の意義はそれなりに大きいけれど、日本人には今西氏の譯注本の方が利用しやすいように思う。

無圈點字書 北京市民族古籍整理。責任編輯 巴德夫。序文 任世鐸。天津古籍出版社。一九八七年八月。一函四冊。滿文書名は *Tongki fuka aka hengen i bihe*。周知の如く滿洲文字には無圈點字と有圈點字（加圈點字）とがある。明末の女眞族は蒙古字を用

い、蒙古語で文書を作成していたが、ヌルハチは萬曆二十七年（一五九九）、文臣に命じ、蒙古字を用いて滿洲語を書寫するように改めた。しかし *o* と *u*、*k* と *g* と *h*、*t* と *d* などの區別のない蒙古字の特徴をも引き継いだために、書寫、讀解ともに不便であったので、天聰六年（一六三三）、この文字に點や圓を加えて音を區別する方法を達海が考案した。そこで蒙古文字のままの字體を「無圈點字」といい、圈點を加えた文字を「有圈點字」或は「加圈點字」と言っている。本書『無圈點字書』は無圈點字を讀む爲の有益な工具書で、滿洲語の語彙が十二字頭表の配列法に従って書き並べられ、まず無圈點字を太字で記し、その左下に細字で、これに對應する有圈點字が記されている。一頁七行。毎行三語乃至四語。手書きの抄本の鉛印本であるらしいが、原本が何處の藏本かは記されていない。本書とはほぼ同じ内容の本が次の書である。

Tongki fuka aku hergen i bithe. Uianbaatp, Instituti Linguae et Litterarum Comitit Scientiarum et Educationis Altae Reipublicae Populi Mongoli, 1959, (Corpus Scriptorum Mongolorum. Tomus V, Fasciculus I.) 345pp. 本書の内容は前記の『無圈點字書』と全く同じ。本書は刊本の鉛印本であるらしく、こちらの方が見出語、對應語ともに鮮明で讀み易い。

A Reverse Index of Manchu. William Rozycki with the assistance of Rex Dwyer, Indiana University Uralic and Altaic Series, Volume 140, Indiana University, 1981, 186pp. 本書は著者がモンゴル語の言語學的原則に關する博士論文執筆中に必要に迫られ、Hauer の *Handwörterbuch der Mandschusprache* の語彙一七、四六一語をもとに、四箇月で作成した『逆

引き滿洲語索引』である。語尾を同じくする語彙が一望の下に配列されていて、他言語との比較研究、滿語文法の研究等の分野で、使い方によっては多面的な機能が期待できる便利な工具書である。

〔滿語文法〕

滿語語言、滿語語法(全三冊)、劉厚生 編、東北師範大學歷史系明清教研室、一九八一年八月—八二年十月。編者劉厚生氏は多年にわたり東北師範大學で滿洲語を教えてきた方で、本書はその教材である。『滿語語言』一冊、一六八頁は滿洲語の音價と文字の讀み方、書寫法が十六課にわけて懇切丁寧に述べられている。『滿語語法』は全三冊で、第一冊は十一課に分かれ、各課はテキスト、單語、語法、作業(練習問題)より成り、この第一冊で大體の文法の説明は終了し、簡単なテキストが讀めるように配慮されている。第二冊、一四六頁は六課より成り、各課は中級者向の課文(テキスト)、語彙、テキスト注釋、語法(文法説明)、翻譯練習によって構成される。課文として「陋室銘」「曹劌論戰」「兩廣總督楊琳題本」「英隆奏本」「雍正五年十二月二十四日抄曹頌家諭旨」「總管內務府衙門題奏」が採用されており、本書が清代檔案を讀解するための實踐的教科書であることが理解される。

滿語讀本 愛新覺羅 烏拉熙春 編著、內蒙古人民出版社、一九八五年四月、本文二九四頁。本書は一二五頁までのテキスト部分と、二五六—二九四頁までの語彙集とから成っている。テキストは全二十課。第一課から第五課までは滿洲語の文字と發音の解説。第六章以下の各課は、リーディング・テキスト、會話、語彙説明、文法解説および練習問題からなる。本書のテキストは『清文啟蒙』

『滿蒙漢合璧教科書』『清太宗檔』『滿洲實錄』からとられている。課のすすむにつれ、文章、會話ともに高度になり、第十四課では『滿洲實錄』がテキストに使われたりするので、文法の説明が追いつかないという一面もあるが、學習者の進度にあわせて編輯してあるので、熟讀すれば高度な實用的滿洲語を習得することができる。本書には徳野伊勒氏の翻譯『滿語讀本』北九州中國書店、一九八八年五月、二二頁、がある。

滿語語法 愛新覺羅 烏拉熙春 編著、內蒙古人民出版社、一九八三年四月、本文五三八頁。第一章「滿語概説」では滿洲語の歴史と變遷、音節の構造、母音と諧律などが解説される。第二章「詞法」は七節よりなり、まず第一節では滿語の全語彙を一、固有語彙、二、漢語からの借用語彙、三、蒙古語からの借用語彙、の三種の類型に分類し、例となる語彙をあげてある。第二節、滿語的構詞では、滿語の單語を構成形式から、單純語、派生語、複合語の三種に分類してある。單純語は滿語の基本單語で、派生語は名詞、動詞、形容詞のそれぞれにつき名詞から派生した語、動詞から派生した語、形容詞から派生した語の合計九種類に分類してある。複合語とは二箇以上の單純語を連ねて構成した語で、并列式、主従式、支配式の三種に分類してある。第三節は詞幹、詞根と詞綴であるが、これは名詞、形容詞、動詞の各語あるいはその語幹に接尾して、或一定の意味を添える接尾辭という程の意で、名詞、形容詞、動詞に附屬する接尾辭が詳しく述べられている。第四節「滿語詞類の劃分」では、滿語を語法の特點と語義から、一、體詞類 (1) 名詞、(2) 形容詞、(3) 數量詞、(4) 代名詞、二、動詞類 (1) 普通動詞、(2) 助動詞、三、附屬詞類 (1) 副詞、(2) 後置詞、(3) 連接詞、(4) 摹擬詞、(5) 語氣詞、(6) 助

詞)の三つに分類している。第五節「體詞」から各品詞の説明となり、名詞、形容詞、數詞、代名詞の各品詞について詳細な分類と機能の解説がなされる。第六節は「動詞類」で、それは(一)動詞、(二)副動詞、(三)形動詞と動名詞、(四)助動詞から成っている。まず動詞を構造上から固有動詞と派生動詞に分類し、また詞綴の變化から規則動詞、不規則動詞、無語尾變化動詞の三つに分類している。bi, aku, boo の三語を無語尾變化動詞に分類していることは注目すべきである。及物動詞と不及物動詞の説明の後、動詞の式の解説が、過去時、現在時、將來時に分けて緻密になされ、動詞の態の説明がこれにつづく。副動詞、形動詞、動名詞、助動詞という品詞を設定したのも著者の獨創によるが、sembi, mutembi, acambi, balanambi, alibi, ombi, bimbi, bi, inu, waka, aku 等が助動詞に入れられている。

第七節は「附屬詞」で、(一)副詞、(二)後置詞、(三)連接詞、(四)摹擬詞、(五)語氣詞、(六)助詞(格助詞、語氣助詞)のそれぞれが詳説されている。第三章は「句法」で、句子の基本成分、特殊成分、分類等が詳説されている。本書は滿洲語を機能、生成狀況、用法等の特點から詳細に分類し、組立ててなった文法書で、著者の獨創が隨所に見られる研究書である。滿洲語の習得を志す日本人にとっては、必ずしも取附やすい入門書とは言えないが、大學の學部生に當る年齢でこれだけの書を著した努力と能力は瞠目に値する。

滿語語法 季永海、劉景憲、屈六生 編著、民族出版社、一九八六年五月。寫在前面的話 徳林。序言 馬學良。本文五二八頁。一九六〇年代に周恩來總理は中央民族學院少數民族語文學系に滿語文班を開設し、滿語、滿文の翻譯工作の爲、滿文の專家を養成した。

本書の三人の編著者は、その課程を卒業した俊秀である。本書は上編 語音、中編 詞法、下編 句法の三編からなり、附録として、一、滿文的標點符號、二、滿漢對照閱讀文選、三、常用詞彙表が附けてある。上編 語音の第一章、語音と字母では各字母とその音價が丁寧に解説してあるので、初心者に便利である。ただ滿洲文字の活字が小さく、且各字母が如何に一語彙を構成するかについての解説はなく、音價は文字では傳えにくいから、學習者は教師について學ぶ必要はあろう。第二章は「元音和諧」すなわち母音調和の説明。第三章は「音節と重音」。

中編「詞法」の第一章は「滿語の語彙」で、滿語の語彙の特色、分類、構成について簡単に説明し、滿語を實詞と虚詞に二大別し、實詞には名詞、動詞、形容詞、代詞、數詞、量詞の六品詞が屬し、虚詞には副詞、格助詞、連詞、後置詞、語氣詞、摹擬詞、感嘆詞の七品詞が屬するとする。助動詞は分類上は動詞に入れられている。

第二章 實詞では、名詞(一)分類、(二)構成、(三)數、(四)格變化、動詞(一)分類、(二)構成、(三)時、現在時、過去時、將來時、(四)態、自動態、使動態、被動態、方向態、齊動態、互動態、持續態、(五)肯定式、否定式、疑問式、命令式、請願式、虛擬式、(六)副動詞、(七)形動詞、(八)動名詞、(九)能願動詞、(十)助動詞、(十一)判斷動詞、(十二)趨向動詞、形容詞(一)分類、(二)級、(三)特點、代詞(一)分類、人稱代詞、指示代詞、疑問代詞、物主代詞、指已代詞、人稱代詞的格、指示代詞的格、疑問代詞的格、數詞と量詞などの詳細な解説があり、第三章 虚詞では、一、副詞、二、格助詞、三、連詞、四、後置詞、五、語氣詞、六、摹擬詞、七、感嘆詞の各品詞について分類し、特點が述べられている。

下編「句法」では語の組合せと造句の規則が研究されており、第一章では「詞組(語句の構成)」、第二章では「句子と句子成分」、第三章では「句子的類型」、第四章では「單句と復句」が解説されている。附録として「滿文標點符號」の説明があり、「滿漢對照閱讀文選」として清代の敕、誥命、諭書、奏摺、題本、「滿文老檔」などからとったテキストが滿漢對照で記されており、最後に「滿語常用詞彙表」として二千三百餘の常用語彙が載せられており、初學者の學習に便利である。

速成自學滿語基礎講義 愛新覺羅 瀛生 著、民族出版社、北京、一九八五年十一月。一四九頁。全五十課。第一課より第十五課までは語音と文字の解説、第十六課から第四十課までは品詞の説明、第四十一課から第五十課までは、『清字一百條』『太宗文皇帝大破明師于松山之戰』『平定朔漠方略』などから抜粋したテキストである。小冊子ながらよくまとめているので、滿洲語の速成自習に適している。

錫伯語口語研究 李樹蘭、仲謙、王慶豐 編、民族出版社、北京、一九八四年八月。三一三頁。本書は「錫伯語口語語法概要」(一八二頁)と「錫伯語口語語彙」の二編から成っている。「錫伯語口語語法概要」は李樹蘭氏の執筆したもので、錫伯文の母音、子音、音節構造と重音、母音調和などの語音の説明の後、(一)名詞、(二)形容詞、(三)數詞、(四)代詞、(五)動詞、(六)副詞、(七)模擬詞、(八)後置詞、(九)連詞、(十)助詞、(十一)語氣詞、(十二)品詞についての解説および句法の説明がある。本書の特色と有用性は李樹蘭、仲謙、王慶豐氏らによって編纂された「錫伯語口語詞彙」によって増し加わる。これは新疆察布查爾錫伯自治縣で話されている錫伯口語の語

彙集で、収録語彙数は約六千。左欄に錫伯口語、中欄に文章語、右欄に漢譯が施されている。先に述べたように現代錫伯語の辭書は出版されておらず、近年出版された錫伯文書籍を讀むには、かなりの不便が予想され、この語彙集によって幾分かは助けが得られる。しかし近い將來本格的な現代錫伯語辭典の編纂が望まれる。

[論集]

AETAS MANJURICA 滿洲時代 本書には次のような副題がつけられている。 *Miscellanea di studi sulla lingua, letteratura e storia mancese del 17° e 20° secolo* 一七—二〇世紀滿洲の言語・文學・歴史に関する研究論文集。編者 Michael Weiers, Giovanni Stary, Martin Gimm. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1987. この論集の著者と論題を次に示す。

- Nicola DI COSMO (Venezia), Alcune osservazioni sull'accento mancese 滿洲語のアクセントに関する幾つかの考察
 FU Li 富麗 (Peking), Über die Charakteristika mandschurischer Gedichte 滿文詩歌の特徴
 Martin GIMM (Köln), Marginalien zum letzten chinesischen Kaiser P'U—I und zu seiner Familie (Teil I) 最後の中國皇帝溥儀とその家族についての傍註
 Giovanni STARY (Venezia), Note sulla vita e sull'opera di G'ulian, poeta e scrittore del popolo Sibe シボ族の詩人・作家であるグイナンの生涯と作品に関する研究ノート
 Michael WEIERS (Bonn), Die Vertragstexte des Mandschu-Kaikha Bundes von 1619/20 一六一九—二〇年 滿洲・ハル

〈同盟條約

Michael WEIERS (Bonn), Konkordanz zum Aktenmaterial der Chiu Man-chou Tang und Man-wen Lao-tang, Jahrgänge 1620—1630, 一六二〇—一六三〇年分『舊滿洲檔』と『滿文老檔』との對照表

[雜誌]

滿族文化 滿族協會(臺北市和平東路二段四九—一號九樓)發行。一九八一年八月創刊。各號約五〇頁。内容は論述、小品、滿族語文、會務に分かれる。「論述」は滿族の歴史、文化に関する専門家による論説。「小品」は滿族の文化についての啓蒙的エッセイ。「滿族語文」は滿洲語の専家による滿語口語入門、翻譯、史料解説。「會務」は本協會が滿族の親睦團體でもあるため、會の活動、會議の記録や會員の消息などが記される。

錫伯文化 *Side šu wen* (錫伯文)、新疆人民出版社錫伯文編輯室編。一九八七年十月創刊。第二期は一九八八年五月出版。民間文學、詩歌、散文、短篇小説、語言文字、歷史資料等を収録した総合雜誌。

滿語研究 黑龍江省滿語研究所滿語研究編輯部編(哈爾濱市南崗區清濱路二六號)。一九八五年創刊、雙季刊。この雜誌は黑龍江省滿語研究所の編纂書であるが、研究所の紀要ではない。創刊號には張向凌氏の祝辭のあと、穆曄駿、法里春、季永海、佟永功、關嘉錄、朝克、安俊、王小虹、郭美蘭、黃錫惠、郭成康、奇車山、付萬金、龍志賢といった著名な滿語研究者の論考が収録され、劉景憲氏の「自學滿語教材」が載っている。以下毎號着實に發行され、滿語

文教學の研究と交流に寄與している。

滿族研究 遼寧省民族研究所（瀋陽市和平大街四段十七號）發行。一九八五年創刊。主編金啓孫。一九八七年より季刊。每號九六頁。滿族の文學、歴史、宗教、風俗、文化、地理などに關する研究および啓蒙的論考が掲載されている。恐らく世界で唯一の滿族研究の總合雜誌である。

滿族研究參考資料 遼寧省民族研究所發行。一九八四年創刊。不定期刊。一九八六年第一期が總第六期。主として中國以外の諸國で發表された滿族に關する研究論文・著作等を翻譯し、中國の研究者に提供するために編輯された雜誌。滿族のみならず滿族との交渉のあつたことを示す錫伯、蒙古、朝鮮、回、西藏等民族の資料や、宗教、民俗などで滿族と同語族、同風俗の資料は、域外のものでも譯出し編纂し參考に供される。これまでの各號には、日本、臺灣、フランス、ロシア、モンゴル、ドイツ、アメリカ、イタリア、ポーランド等の研究者の秀れた論文が譯出されており、中國人のみならず日本の研究者にも有益である。

遼寧文物 瀋陽遼寧省博物館內 『遼寧文物』編輯部編。筆者の手もとには第一・二期が缺失し、第三期（一九八二年十二月）、第四期（一九八三年二月）、第五期（一九八三年六月）、第六期（一九八四年三月）のみがある。遼寧省博物館が『遼海文物學刊』を發行する以前の發掘調査等の報告書であるらしい。第五、六期所收の姚義田「遼寧省考古學文獻目錄（一九四七—一九八二年）」は非常に參考になる。

遼海文物學刊 遼寧省考古博物館學會、遼寧省博物館、遼寧省文物考古研究所 主辦。『遼海文物學刊』編輯部編。遼寧省内のみな

らず東北各省内で出土した考古遺物ならびに遺跡に關する調査報告、繪畫彫刻、古建築物などの調査報告が編輯されている。一九八六年創刊。半年刊。

東北地方史研究 遼寧社會科學院歷史研究所東北地方史研究編輯部、一九八四年創刊。季刊。東北地方の近現代史、清史、民族史、考古與文物、經濟史、歷史地理、人物志、明代東北、奉系軍閥史、人民革命史、歷史地名史研究等に關する多彩な秀れた論文が編輯されている。

東北史研究 吉林省東北史研究會編。第一輯は一九八三年七月發行され、東北史の著名な研究者による二十四編の論文が收められている。

黑龍江文物叢刊 黑龍江省文物出版編輯室編、哈爾濱。一九八一年創刊。季刊。一九八四年第四期で終刊。以後、『北方文物』と改稱。各號一二頁。主として黑龍江省内の考古發見、民族史論、地方史志、古跡文物、人物志、風土錄、藝文志、博物館、紀念館、譯文などの研究論文が編輯されている。

北方文物 北方文物編輯部編。一九八五年創刊。季刊。『黑龍江文物叢刊』がこのように改稱された。編輯内容は『黑龍江文物叢刊』とほぼ同じ。

博物館研究 吉林省博物館學會・吉林省考古學會主辦、博物館研究編輯部編、長春。一九八二年十二月創刊。季刊。主として吉林省内の考古と文物の發掘調査のほか、東北地方の地方史研究、高句麗史研究、渤海史研究、書畫鑑賞、博物館學、鳥類調査、自然史研究、博物館紹介、博物館工作などの研究論文が收録されている。考古學部門のみならず地方史その他の分野でも秀れた論文が多い。

四平民族研究 吉林省四平民族事務委員會編。一九八七年創刊。

四平は葉赫部の本據であつたので、創刊號には、金基浩「要重視滿族問題」、奇浩木子「葉赫部史初探」、伊通縣發掘滿族文化遺產辦公室「滿族在伊通」、范史「滿族家譜」など、滿族關係の論文が多いが、そのほか民族問題や朝鮮族關係の論文も掲載されている。

〔目錄・索引〕

世界滿文文獻目錄 富麗、中國民族古文字研究會、北京、一九八三年十月、一九三頁。

東北史論文資料索引 黃定天、馬秀英、傅明靜 編、黑龍江人民出版社、一九八六年七月、哈爾濱。四八三頁。總論、政治、軍事、經濟、人物、民族、考古文物、歷史地理、文化、宗教、民族、文獻、書評、動態などの部門別に、清末以來一九八四年に到るまで、中國内で發表された六千餘件の研究論文、報告などが収録されている總合的資料索引。

以上に紹介した清初滿文史料のほかにも數多くの滿族研究史料や論文が、單行本として、或は論文集、雜誌に發表されている。陳佳華 編者『滿族史入門』（青海人民出版社、一九八七年）は、小冊子ながら歴史概述、史料簡介、研究總述などの項目に滿族史研究の基礎的知識を要領よくまとめている。金啓琮『滿族的歷史與生活——三家子屯調查報告』（黑龍江人民出版社、一九八一年）、張其卓『滿族在岫岩』（遼寧人民出版社、一九八四年）、『滿族簡史』（中國少數民族簡史叢書、中華書局、一九七九）、『滿族社會歷史調查』（遼寧人民出版社、一九八五年）も滿族の歴史と文化を知るための基本的文獻である。雜誌論文の代表的なものは、晏路『滿族研究論著編目』『滿族研究』一九八八・二・三・四に記されているので参照するとよい。王鍾翰 主編『滿族史研究集』（中國社會科學出版社、一九八八年）は、第一級の研究者による十四編の論文よりなり、現在の中國における滿族史研究の到達點を示している。